Ｍ：では、おはようございます。座学の7回目になります。この頃、大阪漢方と言うのは研修・研究と言うものを基本にしておりますので、講習会ではありません。先月も言いましたように。だから誰かに教えてもらうと言うこともあるでしょうけれど、自分たちも発言して内容を深めていくと言うことが一番良いこの座学の姿ではないかと思いますので、皆さんご協力をよろしくお願いします。それでですね、先月は土の邪、土用の邪でしたかね。その時に素問と難経の違いみたいな話がちょっと出ましたよね。素問では湿、それかた難経では飲食労倦と言う話が出まして、皆さん、そこそこ納得されたんじゃないか、と思いますけれど、土用の前、先月の前が秋ですよね。秋も違うのですよね、素問と難経では。素問は燥、燥邪ですかね。乾く乾燥の燥ですね。それから難経では寒邪と。冷えですね。というようなところで、これにも違いがありますね。で、この辺りも、もう少し土用の、ごめんなさい。冬の邪に行く前に多少整理をして意見を出してもらって整理をしていこうかなと思っています。素問と難経で違う所は、まず風は一緒ですよね。木邪は風になっていますよね。それから素問の場合も熱邪、暑邪というのは同じものでしょうか。暑邪と熱邪は同じですか。本田先生、どうでしょう。

Ｈ：はい、中医学とかでしたら結構分けたりされているのですけど、大体同じようなものだと思っています。

Ｍ：同じようなものと同じものとは違うのですかね。

Ｈ：同じだと思っています。

Ｍ：同じで良いのですか。火邪とは違いますよね。

Ｈ：そうです、はい。

Ｍ：火邪はまた違う条件の時に起きますよね。火を使うような仕事であるとか、何かあの昔であったら縦穴式か横穴式かな、住居で火を焚いたと言うようなことがあった時に風が入りやすいとかいう話もありますし、ま、条件が多少違うとは思いますけど。では火に関しては熱邪でも暑邪でもいいと。それから難経が、今度は土ですね。難経の場合は飲食労倦、それから素問の場合は湿邪、湿と言うものが邪として言われていますよね。これに関しては結構、片岡先生の先月の意見が面白かったですね。素問の場合の、ごめんなさい。難経の場合の湿っていうのは腎にいっていますけど、これは外だろうと。それで素問の場合の脾の場合の湿ですね。難経の場合は外であろう、腎であろう。素問の湿の場合は脾にいっている。これは飲食労倦の特に飲、飲食の飲ですね。そういうものに注目したのではないか、と言うような推論を述べていただきましたけれど非常に面白かったと思っています。次、金邪ですね。金邪、この場合、難経の場合は寒邪ですよね。素問の場合は燥邪、乾きですね。これに関してもう少し何か詰めたいと思うのですけどご意見のある方、ご意見をお持ちの方あったらお願いしたいのですけど。江田先生、どうでしょう。

江田：すみません。別にないです。

Ｍ：何もないのですか？

江田：冷えの季節になると同時に乾燥の季節でもあるっていうので、それを、冷えを取るのか乾燥を取るのかっていう。季節って多面性があると思うので、どこを取るのかで若干違うのかなって言うくらいな感じで思っております。

Ｍ：要するにどちらでも良いけれど取り方の問題だ、と言うことですね。

江田：はい。

Ｍ：片岡先生はどうでしょう。

片岡：燥も冷えやし、素問で言う燥も冷えやし、難経の寒も冷えであるっていうことは同じやと思います。で、両方とも上から空からと言うか上から入ってくる冷えだと言うのも何か聞いたことあるような気がします。で、結局両方金の、五行で言ったら金の属性に配当されているもので治療としては金絡みの治療をするっていう意味では、ものは一緒なのかなと思います。

Ｍ：ものが一緒だったらどうして素問は燥にして難経は寒にしたのでしょう、というのはどうでしょう。その辺の洞察はありますか。

片岡：何をどこの特徴を診てその漢字を充てたかっていうことかなと思うのですね。同じものを診ても診る方向性が違えば出てくる漢字が違ったりとか、素問、あ、難経の寒と素問の寒って言うものを字が一緒やから内容が一緒って思うと、今、森本先生がおっしゃられたように矛盾のようなものが出てくるような気がするのですけれども、漢字は一緒やけれども内容は若干違うとか、そういう風に考えると特に矛盾はないのかなと僕は思っています。

Ｍ：先ほど言われました、その上から入ってくるものに関する考え方ですよね。燥は割と上から入ってくるって言う考え方があるのですけど、素問なんかの寒は下から入ってくるんですよね。だから素問の寒と先ほど言われたことに繋がるのでしょうけど、肺の寒は当然違うと言うことになるんですかね。どうでしょう。

片岡：肺の寒？

Ｍ：肺に対して寒と言うてますよね、難経は。金邪ってね。

片岡：そうですね。難経で金を寒にして、金の寒って訳わからんな。難経で寒って言っているものと湿って言っているのが上から入ってくるものと下から入ってくるっていうふうに区別を、もしできたとすると分かりやすいかな。で、両方とも冷えは冷えやけれども、入ってくる方向性が違ったりとか。

Ｍ：連れてくるものが違ったりとか。

片岡：そうですね。で、まあ、骨って水に属するような感じですよね。感じと言うか水に属するのですけれども、湿のように下から入ってくる、骨身に凍みるようなそういう冷え、芯から冷えるような冷え方って言うものが難経で言っている湿の冷えなんじゃないかなと僕は思っています。

Ｍ：なるほど。要するに寒に湿が絡んだような冷えというのと、寒に乾きが絡んだような冷え、そういう風に分けたら良いのですか？

片岡：はい。

Ｍ：はい、分かりました。他にご意見ありませんか。岩本先生、どうでしょう、こういうこのやり取りに関して。

岩本：そうですね。陰邪陽邪に分けて考えた場合、陽邪なら上から来るやろうし陰邪は下から入ると言うことは、これははっきりしていると思うんですね。だからまあ、それ以上は分かりません。

Ｍ：寒邪は陽邪ですか？

岩本：いえ、寒邪は陰邪です。

Ｍ：陰邪ですか。

岩本：ええ。冷たさは陰じゃないですかね。陰ですよね。

Ｍ：他に何かご意見はありませんか。小池先生なんかはどうでしょう。

小池：雨とか雪は上から入りますよね。陰邪かも、今の岩本先生の分け方やったら陰に入るかもしれないけど、雨とか雪は上から入ると思うのですけど。湿の中でも。

Ｍ：そうですね。診方によったらそういうことになりますよね。そのものを論じたら陰邪でしょうけど入り方っていうような面から論じると違う考え方になりますよね。それだけですか。

小池：それだけです。

Ｍ：他、どなたか何かこのやり取りに対してご意見ありませんか。竹下先生はどう。

竹下：ちょっと今のところはまだ何とも言いにくい感じです。

Ｍ：はい、分かりました。じゃあ、そういうような所で、まあ、これ僕の単なる考え方なのですけど、この辺の話をどういうのですかね、クリアにしてこなかった歴史があると思うのですよね。それは何でかな、と僕なりに考えたのですけどね、身体の中を基本にものを考えれば、要するに精気の虚とか、そういう方向で考えれば邪なんてのは大した問題じゃなかったのでしょうね。大した問題にしなくても良かったのでしょうね。だから飲食労倦であろうと湿であろうと、それから燥邪であろうと寒邪であろうと、それから湿邪であろうと寒邪であろうと、ま、多分、治療のね、大筋には多分触らなかったのではないかと思っているのですね。ただ大阪漢方は邪を触りますので、その辺りは多少どういうのですかねクリアにしていく必要があるかなと思ってこういう話をしてみました。ということで本日はですね、冬の邪の治療、診察と治療ですか。診察と治療でまずは診察の所から本田先生ですね。あ、中本先生か。中本先生お願いします。

Ｎ：おはようございます。学術部長の中本です。よろしくお願いいたします。まずこの場で資料がない方、手を挙げていただけますか。お一人ですか。あ、二人。じゃあ今から資料を二つ、また用意しますので。ありました？じゃあ一つ。それと、まず最初にですね、ちょっとお願があるのですが、今、大阪漢方のサイトの方で、今、動画をアップしているのは皆さんご存知でしょうか。そこでですね、中に字幕を入れていくようにしているのですが、この字幕はテープを聞いてテープ起こしを先ずしてですね、それを付けていくんですよね。ですから発言はですね、はっきりとした声でよろしくお願いいたします。時々聞こえにくい部分があるそうなので、よろしくお願いします。ま、ほとんど僕の発言なのですがよろしくお願いします。はい、では今日は冬に入ってきましたんので冬の診察法と言うことでお話をさせていただきます。よろしくお願いいたします。この11月7日よりですね、立冬と言うことで冬に入りました。そして天気の良い日は、昼間なんかは暖かい日もあるんですが、だいぶ朝が冷え込んできましたね。放射冷却なんかで、かなり岩国の方でも冷え込んできました。それに伴ってですね、気が主に働く場所が、秋から段々陰に重点的になって行っているのですがより深い所で気が働くように、今、冬に入ってなってきているわけですね。で、冬至でクライマックスということで陰が旺盛に、陰で気が働くと言うことになります。ま、今はその途中と言う段階ですね。そして、これがですね、人間の身体でも自然界の中でも同じように、そういうことが起こっていっています。ですから身体の中でもですね、陰が重点的に働く、主になって働くと言う時期に入ってきます。ここまでは大丈夫ですね。あとは冬の脉なんですが十五難を参考に僕はいつも考えているのですが、冬の脉って言うのは微石と言うのが正脉になります。石に胃の気が入った微石ですね。それがあの、気が段々陰に中心が移ってそれが寒さで石のように硬くなると言うような脉。カチカチになってもらったら困るのですね。ですから胃の気が入って程よく柔らかい、でも柔らか過ぎない石のような状態、脉になっているということになります。これは陽気が段々陰の方に移動してですね、押し込められているような硬さと言いますか弾力、気が充満しているような状態なのですね。そういうものを現した言葉が微石と言うことになるかと思います。外気が冷たいので遅くなるのじゃないかと、遅と言うイメージがある方がもしかしたらおられるかもしれないのですけど、正常な脉って言うのは沈濡滑と言う脉になりますので、滑が入っていますので、どっちかいうたらちょっと早めを現します。陽気がいっぱいあるわけですからね、中には。無くなって沈んでいるわけではないので、ただ下に移っているということになりますから陽気はいっぱいあって早くなると。濡がですね、この中でもちょっと分かりにくいかな、濡れるという字ですね。濡と言う脉は細くて柔らかくて力のない脉と言うふうに脉経では書かれています。正確に言うと「濡脉は極めて柔らかく浮で細である。水中の絹のようにそっと触れば得られる。按してはなくなり、そっと挙げるようにすれば有余である」と言う風に書かれています。ですから、その細く柔らかくて力のない脉って言うのは石脉、その陽気がギュッと固まったような石脉と言うものとはちょっとイメージが違うのですが、そのへんがちょっと分かりにくいかな、と僕の中では思っています。平脉をですね、言うと「上大にして下兌（えい）」、下が大きくて、あ、上が大きくて下が小さい。尖っていると。逆三角形みたいな脉になるかと思います。ですから、あの上から押さえていくと、上は大きい脉を打つんですが段々下で細くなってくと言う脉ですね。そういう脉が石脉ではないかと思います。これが病脉になって行くと啄啄、これは鳥が餌をついばむような連続して打つようなことなのですが、「啄啄として連続し、その中微曲する」少し曲がると言うように書かれています。だからこの逆三角形が綺麗な二等辺三角形みたいじゃなくて、少し下の辺がちょっとグチャっとなってくるかなと、曲がっているような感じなのかなと言うイメージですね。それが病脉になると「来ること解索」これは根本がなくて空虚で緩やかであるというような脉なんですが、「解索の如く、去ること弾石の如き」と言う風に書かれています。この弾石の如しなんですが、最初はあの石脉という硬いと言うイメージが先にあるので、結構堅いんかなと言う感じがするのですが、その前に柔らかい力がなくて空虚で緩やかだと言う風に書かれているのでちょっと違うなと言う風に思っています。この弾石の如しというのは石が弾いたように去る時は素早く去ると言う意味なんじゃないかなと、今は思っているのですが、この辺もあと皆さんのご意見も伺えたらなと思います。先日、これ病脉かなと言う人を診たのですが、肩こりとかメンテナンスとかそんな重篤な症状ではない人なのですがね、病脉ですからそんなにきつくはなかったのですが、その人はこういう逆三角形じゃなくて下の辺がグチャっとしているような何かよく分からないような脉をしていました。上を触ると大きいのだけど下に行くに連れて段々細くなって先っちょがよく分からないような脉だったんですね。多分それが病脉かなと言う風に診ています。とにかくこの死脉っていうのが僕はよくまだイメージできていないので、何とも言い難いのですが。あとはですね、「解索の如く」っていうのは力がなく縄がほどけているような感じと言うので、昔、腎と言うのは水があって固まる性質があると言う風な話って言うのは聞いたことがあるのですが、そういうですね、腎の力が無くなって、もしかしたらその津液が足らなくなってですね、段々硬くなっていく。硬くなっていって、もっともっとその津液が無くなって行くとボロボロっと崩れていっているような、そういうイメージなのかなと言う風に考えてはいます。ま、そういう感じですね。あとちょっと皆さんのご意見をお聞きしたいのですが。

Ｍ：はい。今、冬の脉に相当力を入れて説明していただきましたけれど、この説明で疑問がありましたら中本先生にぶつけてみてください。いかがでしょう。皆さん分かりましたか全部。西村先生、分かりました？全然分からへん？大体分かりました？

西村：はい。大体分かりました。

Ｍ：素晴らしい。中本先生、どうなのでしょう、その微石、石という要するにね、字と言うか言葉を持ってきたという何か意図みたいなものは、どういうように先生なら洞察されますかね。

Ｎ：えっとですね

Ｍ：柔らかい石って何か分かりやすいような分かりにくいような感じしません？

Ｎ：します。段々下に沈んで行って、それで凝縮するような物なのだと思うのですね。その脉自体が。自然界でもそれに、それと同じようなイメージがあるっていうたら例えば水の中でも石が沈んでいるとかですね、そういう風なことで石と言う字を当てはめたんかなと言う風に思っているくらいなのですが。

Ｍ：えっと何て、解索って解索の如し、でしたか。

Ｎ：はい。死脉はそうです。

Ｍ：それは要するに津液が抜けてパサパサになったような状態と言うイメージですか？

Ｎ：はい、僕は今そう思っています。

Ｍ：そしたら弾石の如くというのはその途中ですか？

Ｎ：弾石の如くはですね、その、いやその途中ではここに書かれているのは多分同時に起こるものじゃないかなと思うのですが。去る時、去ること弾石の如しなので、来る時はそんなに力がないフニャッと崩れているような脉、で去る時はシュッと早い。分かりますかね。

Ｍ：早いのですか。何かビンと打つような感じではないのですか。

Ｎ：去る時ですから打つ時と言うよりは。

Ｍ：はじくような感じのイメージではないのですか？

Ｎ：指から逃げていくような感じなのだと思います。

Ｍ：と言うことは結局長いこと指に触っていないという

Ｎ：そうだと思います。

Ｍ：そんなイメージですか。

Ｎ：はい。

Ｍ：でも脉は、はっきりしているのですか？その辺りはどうなのでしょう。

Ｎ：解索ですから根本がなくて空虚で緩やかって言う所は、はっきりはしていなのじゃないでしょうか。

Ｍ：要するに何かよう分からんけど、来た来た、んで、帰る時はピタッと帰りよったみたいなそんな感じですか。

Ｎ：そうですね。

Ｍ：これが死脉ですよね。病脉はどうなのでしょう。

Ｎ：鳥が餌をついばむように連続して起こって、その先っちょが曲がっているという、その中か。中が微曲するという風に書かれているので、その中が曲がっている。

Ｍ：これは打ち方の問題を言っているのですかね。

Ｎ：打ち方と言うか、僕はその形じゃないかな。

Ｍ：脉の形？

Ｎ：指を沈めていって分かるところが下の方にあるものかなと思っています。

Ｍ：なるほど。と言うことらしいですけど、何か疑問ありませんか？それとか、僕はこう思うとかいうような考えは。脉状に詳しい小池先生、どうですか。

小池：あまり詳しくないですが、石という表現については私も沈濡滑と矛盾しているかなと思って調べてみたのですがこれと言って載っているのがなくって、最終的にテキストを見たら「石のように丸い」って言う表現があったのですね。で「あ、それか」と思って。だから石って言ったら水に沈みますよね。それで沈を現して、石って言うのは必ずしも硬さを現しているのじゃなくて、丸みって言うのを石で表現しているのかなって言う風に思いました。

Ｍ：なるほど。あと沈んでいるということですかね。

小池：はい。

Ｍ：なるほど。それが石と言うものにイメージがしやすいわけですよね。

小池：はい。

Ｍ：なるほど。他どなたかありませんか。山崎先生。

山崎：冬で水に沈んでいるものっていうイメージを持つようにしています。で、冬やから水となると、氷、言うものをイメージするんやけど、氷の中に沈んでいる石ではなくて水の中に沈んでいる石って言うイメージなのです。だから柔らかいものの中にしっかりしたもの、今、言われた小池先生が言われた丸でも、丸でいいんかな。柔らかいものの中にしっかりしたものが手ごたえとしてあると。その柔らかいもの言うのは、冬やから水だ氷やないかじゃなしに、湯でも液体の方の水で柔らかい濡で柔らかい、ほんで、その中に硬いと言うよりは、何かしっかりした丸い丸みのある輪郭のあるもの言うことで、陰の中に陰に守られた、陰と言う水に柔らかい水に守られたしっかりした陽、言うような意味合いがあるんかなと言う風に今んとこは理解しています。

Ｍ：はい、片岡先生、どうでしょう。

片岡：そうですね。秋も、秋毛って書いてあって冬が石って書いてあって、今、水の中で沈む石って言う話あったように、水に毛が浮いて秋は浮とか。で冬の脉は沈むみたいな。その水に対して浮くか沈むかって考えると分かりやすいなと思いながら小池先生の話、山崎先生の話を聞いていました。

Ｍ：はい。どうもどうも。と言うことで、まあ、あの要するに水の中に丸いものが沈んでいるようなイメージで微石と言っているのだ、と言うような意見ですよね、皆さん。それでよろしいですか。丸いようなものが要するに沈むようなものが。岩本先生。

岩本：今日、読んで来たのですけどね。難経解説に微石と言う所で、私、漢字が分かれば一番的確な意味がつかめるのですけど、墨字でないもんで。微石と言う意味が非常に硬いって書いてあるのですよね。だから微と言う字がどんな字か分からないのですけど、硬い石って書いてあったんで

Ｍ：微は「かすか」ですよね。

岩本：さあそれが「かすか」ならそんなに硬くはないと思うんやけど、だからその微と言う字が分からないのですよね。

Ｍ：「かすか」は「かすか」ですよね。胃の気のみですよね。要するに胃の気がちゃんとあってそれに微かに硬いものがあるという要するにそういうイメージでしょ。

岩本：ええ。そういう風に考えていたのですけど、そこの説明では非常にこの微石と言うのは硬いという意味だと言う風に書いてあるのですよね。だからちょっと分からなくなったのですけどね。

Ｍ：でも微って言う、石だけだったらそういう解釈もできるでしょうけど、微が入るとちょっとちょっと怪しい感じはしませんかね。

岩本：そう思うのですけどね。また字を調べてみます。

Ｍ：はい。多分、微は全部、微弦とか微鈎とかね微毛とかの、あの微でしょうね。はい宜しいでしょうか。山崎先生どうぞ。

山崎：すみません、あの本屋さんに喧嘩売るわけじゃないんやけど、今のような発言があると黙ってられんので言いますけど、難経の原文、それから書き下しもいけるかなと思って読んでいます。だけども現代語訳はちょっと気を付けて読まないと、と僕は思っています。ましてそういう微石の微の解説の所なんかは別にそれが正しいか間違いかは知らないのですけど、全く原文とは違うことが書いてあるくらいの思いで読まれることをお勧めします。って、岩本先生に言うのは失礼な話なんやけども僕はそういう風に読むようにしています。そういう風に読めたから８月の僕のランチョンセミナーの発表もできるようになったので、あれ、そういう言う読み方をしてなかったら未だに分からなかったので。もう一度言いますと原文は原文だけで、難経解説のほうね。原文は原文、原文だけで原文は漢字ばっかりやから読むのは大変なのですけど、そのあとの書き下しは日本人ができるだけ原文に忠実にやりましたって書いてあるからそこは同じ同胞としてちょっと信じてあげてぐらいにしとかないと、そのあとは自由に研究発表されているんやと思って読まないと、原文通りには書いてないように僕は受け取りました。いうことで。

Ｍ：はいどうもありがとう。

山崎：岩本先生に、こんなこと言うたらちょっとかえって失礼やと。

Ｍ：いやこれ大事なことです。大事なことなのですよ。本をね、読む時にその人がね、一体どういう立場で書いているかということをね、やっぱりまず知ってから読んだ方が良い場合が多いのです。自分と同じ立場でね、書いてくれているなんてどうしても思いがちですけどね、案外違いますよね。だからそれはその山崎先生が言われたように一つの解釈であると言うようなものの考え方をした方が間違いは少ないでしょうね。ですから、必ず古典を読まれる時に、この人は本当に鍼をしていた人なのか、それから薬ばかりをやっていて鍼はついでにやっていたくらいの人なのか、それによって全然書き方が違いますからね。だからその辺も大切なことだと思います。はい。ではよろしいですか。はい、じゃ次。

Ｎ：はい。今度は、体表は、じゃあどう診るのか、と言う風な話をちょっとさせてもらいます。脉はね、そういう風に沈んで、ある程度硬い弾力のある脉になるのが正常だと言う風に説明したのですが、今度は体表ですね。他の蔵、他の季節っていうのは結構体表、皮毛の部分に色々兆候が表れている場合が多いのじゃないかと思います。じゃあ、その冬はですね、陰の部分が主になって働く活動拠点となっていますので、じゃあ、その下を診ないといけないのかと言うことになりますよね。脉でもそうですが、正常な場合、脉が正常な場合ですね。脉が正常な場合は身体の奥はまず充実はしていますよね。そうすると陰陽論で言えば中がちゃんとなっていれば外もちゃんとなっていると言う風に考えてもOKなんじゃないかなと思います。ですから、体表を診るだけでも中の充実度、気の状態は分かってくるのじゃないかと思います。さっきも話が出ましたように、この時期って言うのは寒くて乾燥していますので、ある程度皮毛の乾燥って言うのは、多少はあるかもしれませんけどね。冷たいとかそういうものはあるかもしれないですけど結構充実していると、と言う風に診ても良いかなと思います。それでですね、今度は病脉、死脉の場合はどうなるのか。段々脉が硬くなるわけですよね。で、脉が硬くなって濡とさっきの陰陽論で言えば、表面はちょっとフニャッとなっている場合が考えられます。最初に森本先生が言われていた、この時期って言うのは、素問は、あれ何だったっけど忘れして・・・寒邪、難経では湿邪と言う風な邪がありますよね。そういう風に緩んでいるというようなことがありますよね。そうなると中は硬くなっている、外は緩んでいるっていうことも考えられるかなと思います。それであの外を診て中の状態を知ると言うことができるのですね。それが陰陽論だと思っています。一応この体表っていうのはこのくらいで。

Ｍ：はい。どうでしょう。これ結構臨床に大切な部分だと思います。今の中本先生の説明で何か臨床で役立ちそうですか皆さん。役立たせられそうですか。まあ、あの充実しているのは論外ですよね、治療する必要はないとして。我々の所には充実していない人が来るわけですよね。そういう人の場合の冬の身体って言うのはどうなのでしょう。今の説明で分かりましたか。山崎先生どうでしょう。

山崎：外が硬いとか柔らかいとかもあるし、陰陽でひっくり返ると言うような表現をされましたけど、全部が柔らかいいうのもあるし全部が硬いのもあって冬らしく、先ほど言われた理想的な脉以外の奴は全部病脉やっていうのが前置きであるのかな思って聞いとったんやけどそれはそれで良いんですよね。それただ飛ばしただけで。

Ｎ：はい。

山崎：そういうことですよね。それの一例として陰陽論、せまい意味での陰陽論で言うたら逆になりますよと言う表現なのですよね。確認です。

Ｎ：ありがとうございます。

Ｍ：具体的にはどうですか。分かりましたか。これ触って、今でしたら湿邪、難経で言うたら湿邪ですよね。湿邪に侵されているっていうのが体表を触っただけで分かるでしょうか。どうでしょう。誰に当てようか。西村先生どうでしょう。

西村：いつもフニャッとしているのが緩脉の時のフニャと水穴を取る時のフニャの差がよく分からないので教えてもらえたら助かります。

Ｎ：はい。僕が考えている緩脉の時のフニャは本当に力がない状態ですよね。緩んでいる感じです。で、この湿邪の場合の緩んでいるは水がいっぱいあると言うポチャポチャと言ったらいいのですかね。そういう感じのちょっと触った感じは違うと思います。

Ｍ：どうでしょう西村先生。

Ｎ：水がある感じですかね。

西村：潤っているとも違うのですか。

Ｎ：違います。表面は乾燥している場合が結構多いと思います。どう言うたら良いんかな。皮膚の中に水がある。

西村：はい、ありがとうございます。

Ｍ：あの浮腫って分かりますかね。浮腫。水腫とか浮腫とか。山崎先生、何か良いアドバイスはありますか。

山崎：良いかどうかは知らんけども、脉なんかで言えば緩は全部上から下まで柔らかい。グニャっとしている。それで水いう表現を使っちゃうと水みたいなイメージが各個人ここに人数分だけおられる分だけ水に対してイメージが違うと思うので、水ってものすごく硬いものやって言うイメージ持っておられる人もあると思うので、水の柔らかさって言うのが多分中本先生と他の先生で違いがあると思うので。緩の方が緩脉の緩の方が柔らかい、いうのは大体みんな同じような意見やろうけど、水に対しての柔らかさは個々によって違うと思うのですよね。僕はもうややこしいから水も緩脉も一緒にしとるのですけども、ただ水穴使う時は真ん中辺でちょっと硬いのに出会って言うような感じで緩脉の中に中心部分にちょっと硬いのがある時は水穴使うけども、上から下まで緩んでる方で柔らかい時は今、例えば土穴を使うような、そんな使い分けを自分ではしています。参考になるかどうかは分からないけど。

Ｍ：西村先生、参考になりましたか。

西村：はい、ありがとうございます。

Ｍ：基本的にはね緩んでいるは奥まで緩んでいる場合が多いですよ。いつぞやあなたが聴講で来られた時に多分見せたと思いますけどね、結構奥まで深く指が入るような感じですね。で、要するに湿邪にやられている時ってね、結構表面がやられている場合が多いですね。だからちょっと奥に入ると結構堅くなります。山崎先生の今の脉診に割と似たような説明になると思いますけれど。よろしいですか。

西村：ありがとうございます。

Ｍ：他にありますか。この辺りでこれからですね、今日の昼からもこういうポイントで観察ができると思いますのでやってみてください。じゃ次行きましょうか。

Ｎ：じゃあ３番目の精気の虚と言う所に移ります。今、この時邪、冬の邪っていうのを考えている訳なのですが、精気ではどうなっているかということですね。五蔵で言えば腎は冬を主るわけですね。「足の少陰・太陽の主治なり」これは素問の蔵気法時論篇に書かれています。腎が充実すればですね、寒い冬を過ごすことができるわけです。そして次の春に発生する力を蓄えていると言うことですね。ですから、その、この時期って言うのは腎・膀胱を主に働いて、働かせて冬の陽気を外に漏らさないようにして、次の時期にちゃんと肝の働く時期に肝に力を送っていると言うことになりますので、この時期に何か不調があれば腎・膀胱と言うものを力を付けていくというような治療が考えられます。これは精気の虚を考えた場合ですね。精気の虚と冬と言うことを結びつけて考えた場合はこの時期は腎・膀胱を触ることが多くなります。またそれが前の季節と言うのを同じことを考えることができるわけですね。この冬にちゃんとそれが働く腎・膀胱が働くためには秋にちゃんとした生活、何か体調を崩していれば治療と言うものをしておかなければいけないと。そうるすと、その秋って言うのは肺、先月やりましたけれど肺をちゃんと働かせて気を下に取り込んで収斂していってですね、冬に備えると、と言う風な時期になりますね。ですから、そういう風に季節ごとにちゃんとした生活をすれば次の季節に健康に動くことができる。それがずっと続いて年中健康だと言うことになるわけです。そうすると、あのそれでですね、腎が弱くなるこの時期は弱くなるとちゃんと腎を養いましょうと言うことになります。で秋の養生も大事だと言うことになりますね。ま簡単なのですが、精気の虚はそういう風に考えていきます。

Ｍ：はい。どうでしょう。あのちょっと意地悪な質問かもしれませんけど、腎って言うのは水ですよね。熱はあまり扱わないと言うレベルの蔵だと思うのですね。なのに腎が充実していて、冬が、身体が温いなんていうのはどういうことなのでしょうね。

Ｎ：心の陽気、心包の働きもするって言いますよね。それで陽気を下に送ってですね、充実させて、腎間の動気でしたっけ。下腹をちゃんと力強く温かくすることができると考えています。

Ｍ：皆さんそれで宜しいですか。要するに心包に影響して、要するに心包三焦論を、今、言われたのですよね、中本先生。

Ｎ：はい。

Ｍ：山崎先生どうでしょう。

山崎：あんまりしゃべったらまた文字が分からん言われそうやけどしゃべります。水はどう言うんか、中が熱で表面が冷えっていうのが陰陽論で出てきたのですよね。だからそれで全てが分かる言うんか、水イコール冷たい、熱と関係ないのじゃなしに、地球と言うこの星だって水でコーティングしてあるからこそ暖かいのですよね。地球に、もし水が無くなったらコーティングするものが無くなるから中の熱はドンドン外へ飛んで行って冷たい星になっちゃうというような感覚で良いのじゃないか。だから水イコール冷たいじゃなしに、水イコール中の熱を守っているぞと言う意味だと思います。それで来るべき季節が来るまで逃がさないようにしてくれている、言うのが大前提やと思います。それを東洋医学的のその三焦が、心包が言うてあとから僕は色々な説明が付いてるのだと言う風に、そう言う理解の仕方するようになってからすんなり入ってくるようになり、それまでは水は冷たいのに何で冬の大事なところで、腎臓で使うのか、おかしいなと僕もちょっと思っていたんです。水こそ冬には必要なのだと今は確信持っています。

Ｍ：片岡先生どうでしょう、今の山崎先生のご意見。

片岡：大変勉強になりました。

Ｍ：それだけですか。異論はないのですか。

片岡：あんまり考えたことなかったので。

Ｍ：これからまた考えてください。

片岡：これからですね、はい。

Ｍ：まあ要は上手いこと一つが上手いこと回れば全部が上手いこと回るようになるから、当然熱も身体のね、上の方にあったら熱いでしょうけど足の方に下がれば丁度温うて、いい状態に身体はなるのでしょうね。世の中も同じですよね。と言うようなことでまあまあちょいと意地悪い質問をしましたけれども。中本先生それで良いですか。

Ｎ：はい。

Ｍ：じゃあ本田先生ですか。では治療法の方に移ります。

Ｈ：はい、それでは冬の治療法の方へ入りたいと思います。 あの、もう皆さんもこの季節の 影響というものを感じていると思うのですけど 、あの今日なんかはとっても寒いですよね 。あの、僕の家の近くでも すごく寒くてですね、ズボンの下に下着を履かないとですね、寒くて過ごせないというぐらい 、ということで、やっぱし冬の邪の影響を受けているんだなと、ま、ちょっと歳を取ったかもしれないのですけど、そういう感じを受けています。 で、秋からですね、だんだんと陽気が衰退してきて、ま、陰気がだんだん目立ってきて、冬って言うのは、陰気が一番大きくなる季節、という事は、中本先生のお話で、あの、理解できるところだと思います。で、それをどういうふうに治療していくのか、という事なのですけど、やっぱし、その陰気がですね、身体に影響していくという事を考えれば、邪気として捉えられる、という事で、身体の、まぁ、身体と言いますか、陰の部分に冬の邪氣、と言うものを捉えていく、という事で、冬の季節の脈状はとても参考になります。で、胃の気のある脈はですね、沈滑軟だとか、微石という事で、見て取れるのですけど、僕たちは治療するときに、そういう胃の気のある脈状ではなくて、病脈を探していますよね。で、病脈は、どういうなものかと言うと、少し沈脈で、中がちょっと充実している、弾力がある脈ですよね、で、それがもっともっと悪くなれば、微石、微石じゃない、石脈が目立つという、堅くなって、弾いているような脈になります。脈診でですね、その沈脈というものを、石脈と言うものを見つけていくという事が、まず鍼をする時の大事な情報になっています。そこの沈脈の所で、精気と邪気の戦いが行われている訳ですよね、邪正抗争という考え方なのですけど、で、邪正抗争をしている所の精気側に目を向けるのを精気の虚の治療なのですけど、邪気を捉える場合はですね、実脈を探していく必要が出てきます、沈実脈ですね。プラス冬の邪気の影響のある脈状ですね、一応、沈脈というものも参考になるのですけど、あの、堅い、堅いというか、弾力のある脈ですね、こういうのを見つけていくようにしています。逆に精気の虚を考える場合は、陰の所にたくさん陰気が集まっている、という事で、陽気の部分は少なくなっていますから、陽気を補う、ま、衛気を補う事が精気の虚の治療になります。で、ここに鍼をするわけなのですけど、あの、基本的に営気が流れている部分ですよね、営分と呼ばれている所、ここに鍼をする時は、あの、衛気を傷つけないように、という事が、７１難に書いてありますので、少し指を使って、表面の衛気をですね、退ける作業をしています。で、今、色々なやり方が出てきていますよね、あの、昔はですね、経絡の走行があって、縦に走行があったら横に退けるようにような指先で行う手技をしていたのですよね、最近は、実技の時に、森本先生がアドバイスして下さった、少し円を書くやつですよね、あの、少し楕円形を書くような、反時計回りで。あと、ワイパーのように、左に１０度ぐらいに傾けて、傾けて、傾けて、と言うような、そういう手技もしながらですね、衛気をどける作業をしています。で、営気が流れている部分ですね、ここに鍼を入れる、という事で、瀉法をしているのですけど、これも最近なのですけど、衛気と営気と言うと二元論ですよね。浅い深い、と言ってしまうと、それまでなのですけど、あの、それを考えるとですね、浅さ深さの範囲がですね、むちゃくちゃ広くなってしまって、自分が鍼をしたいところに、本当にできているのかな、という事に、気づいたのですね、もう、気づくのがおそいのですが。で、例えば、菽法などで五段階に分かれていますよね、えー皮毛、血脈、肌肉、筋、骨ですね、衛気とか営気と言うのはですね、衛気は皮毛で、血脈は営気の流れている部分で、一応分けられていますので、もしかすると、そんなに深いところまで鍼をする必要はないのでは、という事が、今回の実技の中で、それも森本先生がお話しして下さったこととか、入門部で三菽、六菽で治療すれば良いですよ、と言うお話をビデオで聴いて、参考にしているわけですね。だから、営気が流れている部分にある邪気を取り除く時に、自分の臨床では、そんなに深い所まで鍼を入れなくなった、と言うことです。ま、それが本当に、自分の治療室の中では良いと思っているのですけど、あの、それを一度皆さんと一緒に考えたいと思って、今、お話ししています。邪正抗争の治療の部分はここまでです。

５６：１６

Ｍ：はい。えーと、今、あのちょっと問題提起されました、衛気の部分と営気の部分で、鍼は十分ではないかと、ま、僕が入門講座で、このことを言っているのです、三菽と六菽で、もう全然勝負ができます。じゃあ、えー深い所の話ね、どうすれば良いのか、簡単なのですよね、どう思います、片岡先生。

片岡：三菽、六菽。

Ｍ：だから、衛気営気に作用させるのは、もう三菽六菽ぐらいで良い訳ですよね。（片岡：はい）でも十二菽や十五菽に効かせたいこともある訳ですよね。（片岡：はい）その時、どうされますか。

片岡：三菽六菽に鍼をしたらよいと思います。

Ｍ：それも芸がないでしょ。もっと芸のあること言って下さいよ。これ、簡単ですよ。要はね、ツボを変えればいいのですよ。ツボを。そうでしょ、水穴は、腎と十五菽は水穴というのは、これは横並びですよね。そうですよね。それから木穴と、それと肝と十二菽は、言うと横並びですよ。そういうふうに考えていくと、ツボを変えれば、いくらでも、もし、そういう所にね、邪が入ったとしましょう、でも、十五菽まで、例えば、あの、どういうのでしょうかね、手法を加えるなんて、なかなか難しいですよね、特に鍉鍼では無理と思って良いのではないでしょうかね。その時何をすればいいのか、単にツボを変えれば良い、簡単でしょ。どうでしょう、本田先生。

Ｈ：はい、その通りだと。僕もそれで調節が、ま、脈状を診て鍼をしている訳なので、脈状でツボが決定するから、自動的に、あのツボの深さだとかですね、脈状で決まっているのだな、と言う所は、分かって使っていなかったのですが、最近、分かってきた、ということです。

はい、他にどなたか、今の私の意見に、あの、憤懣はあるでしょうね。憤懣がある人はどうぞ。憤懣第一号。

岩本：いえいえ、憤懣ではないです。（Ｍ：あははは）その通りで良いのですけど、私ちょっとお尋ねしたいのは、あの、払う場合の三番目の、三番目にどうすると仰ったのですかね。三つあったですよね、払う。（Ｈ：はい、ありました）その三つ目をもういっぺん教えもらえますか。

Ｈ：あの、まず二番目の円を逆時計回りに回すようなやり方があって、それをですね、あの上の部分だけですね、回さないのですよ、（岩本：上の部分だけというのは、表面の事ですか）表面ではなくて、円を書く中の上の部分ですね、半円ぐらい、半円ぐらいを行ったり来たりではないですね、左に動かして、また右に戻して、左に動かしてと言うのを少しやっているというぐらいですね。（岩本：２、３回やるという事ですね）そうです。で、それもですね、実技とか自分の臨床でも思う事なのですけど、やり過ぎているのが多いですね。自分の経験でも、今まで。例えば、浮脈の時などに、ツボに指を持っていく時は、衛気は退けないですけど、持っていったら、けっこうすぐに変化するというのがあって、それで営気の時も、衛気よりも営気の方が深いから、少し丹念にするのがあったのですが、丹念にし過ぎてしまっているという感じがあって、最近は、その三分の一、三分の一以下ぐらいの触り方、触る時間にしています。

岩本：あ、そうですか、あの、ちょっとくどくど聞いて恐れ入ります。あの、じゃ、指で払う場合と、今の三番目のようなやり方ですね、それはどういうことで決めるわけです。

Ｈ：僕は、前は一番目のパッパと払うようにしていたのですけど、あの荒い気がします。荒い気がします。だから、自分が思っている脈状の変化というものが、あれ、違うな、と思うような感じですよね。で、上手な先生方の指先を見ていると、パッパとやっていない時もありますので、もうちょっと丁寧にした方がいいかな、と思って、それを使っています。

岩本：なるほど、それは脈状に従って手捌きを使い分けるという事ですね。

Ｈ：はい、そうです。あとはツボ反応ですよね。（岩本：はい、ツボ反応ですね、どうもありがとうございました）

Ｍ：はい、山崎先生、どうぞ。

山崎：えーと、話を戻します。あの、三菽六菽だけで、忘れてしまいそう、あの、だけで良いのでは、ほんなら、十二菽十五菽の処理はどうするんや、という話ですよね、えーと、話が、どう言うのかな、入れ替えられたような感じがあって、あの衛気であろうと、営気であろうと、三菽にも六菽にも九菽にも十二菽にも十五菽にも作用させるという為に、選穴論を用いる、と言う考え方を僕はしていたものですから、それは衛の手法でも衛気に対しても営に対しても、という感覚だったのですが、その辺りの所はいかがでしょうか。

Ｍ：どっちでも良いのではないでしょうか。両方いけますよね。（山崎：えー）うん。だけど、一応ね、どうして僕が三菽六菽って、入門講座で言っているのか、というとも一応言っておきましょうかね、あの、要するに、皆さん、手が重たかったら、鍼の効果なんてないのですよ。出てこないのですよ。あの、余程良い手をしていたら別ですよ。でも、入門講座を受けられる先生方は、まだまだ、どう言うのですかね、経験の少ない先生もいらっしゃいますからね、そしたら、一番うまくなる方法はどういう方法か、と言うように、考えている訳ですよ、だから、多少山崎先生の状況とは違うかもしれません。

山崎：わかりました。そう言う意味であれば、わかりました。

Ｍ：はい、いいですか。他。はい、じゃ、江田先生。

江田：すみません、江田です。森本先生にちょっと質問なのですけど、先ほど、十二菽十五菽は、その木穴とか水穴と仰っていましたけど、あの、筋会とか髄会、髄会じゃない、骨会を使うというのは、どうかな、と。（Ｍ：ぜんぜん問題ないです）問題ないですか（Ｍ：はい、三菽六菽で使えば良いと思います、あのテクニック的にはね、はい、別に鍉鍼で十分効果が出ると思います）ありがとうございます。（Ｍ：出ると思いますじゃない、出ます、間違いなく出ます、よろしいですか）はい、ありがとうございます。

Ｍ：はい、猪上先生。

猪上：猪上です。もう一度ツボを変える話をもう一度説明をお願いいたします。

Ｍ：ツボの話ですか。はいはい、（猪上：木穴とか水穴とか）基本的に言いましたら、例えば、まぁ、三菽であれば、肺の所ですよね、ですから、金穴が使えると、別に金穴でやればいけると。で、六菽をやるとしたら、火穴が使えると。心の範囲ですからね。木火土金水の火ですから。はい、それから、九菽であれば、土穴が使えると。九菽、脾ですね。で、十二菽であれば、井穴、木ですね。木が使えると。これは陽経でも同じですよ。陽経でも木火土金水でいかれたら良いと思います。井滎兪経合ではなく、木火土金水でいかれたら。で、木火土金水と井滎兪経合の使い方の違いと言うのは、病症で取るか、五行論で取るか、いう事で分けられたら良いと思います。あと、十五菽が腎ですね。腎ですから、それに関係するツボと言うのは水穴ですよね。というふうに、考えている。そうしたら、三菽とか六菽でのテクニックでも十分に効果が出ると。要するに腎とか肝に影響させたい、それでも、三菽とか六菽だけで腎や肝に影響するのかなと、どうしても疑問になる部分があると思います。それを解消する方法です。よろしいでしょうか。（猪上：はい、わかりました。ありがとうございます。）はい。こんな話、なんぼでもするで。はい、良いですか。えーでは次。西村先生、はいはい。どうぞ。

西村：すみません、その所が難しくて教えて欲しいのですが、浮いていて弦を取ったと、三菽ぐらいに邪があるからとか、えーと。

Ｍ：そうしたら、簡単です、三菽の木穴を使えば良いのです。わかります。三菽の中で木穴を使えば、十分にいけますよ。だから、浮いていて弦もありますよね。弦が必ずしも十二菽にあるとも限りませんよね。（西村：はい、ありがとうございます）はい。で、肝に必ずしも、どう言うのですかね、風が入る訳でもないですよ、他の所に風が入りますからね。そうでしょ、心にも入るし、心にも入るし、ただ、親和性としては肝には一番入りやすいという傾向はあるという事は古典に書いてありますからね。宜しいでしょうか。（西村：ありがとうございます）頭、ごっちゃになってきました、皆さん。大丈夫ですか。けっこう臨床的に美味しい所ですので、もし、試す、やられたら良いと思います。びっくりするぐらい、脈が動くことがあります。はい、ではいきましょうか。

Ｈ：では、続けていきます。えーと、その次にですね、邪気が在る所がわかって、診察でわかったら、使うツボなのですけど、あの先ほどからずっと出ているのですけど、季節の治療穴と病症の治療穴が書いていて、季節の治療穴の場合は、冬は合を刺す、という事で、第一選択に合穴を使っていく、という事ですね。陰経の場合は、合水穴、陽経の場合は、滎水穴、合土穴を使います。で、病症はですね、難経には、冬と関係のあるものとして腎が書かれていて、で、これ４９難にも病症が書かれていますよね、で、どういう病症なのか、と言うと、逆気して泄す、だとか、あとは、お腹、小腹、下腹が痛くて、足が冷えて、逆気する、と言うような時にも合穴と言うものが使えます。腎とか膀胱に関係する病症があればですね、もし、脈状が分からない時には、このようなツボを使ってみることを僕はしていました。ただですね、浮沈の違いは、やっぱし診分けていく方が良いと思っています。だから、冬の季節はやっぱり沈む傾向にあるという事で、沈脈が認められて、腎とか膀胱、または、難経のこれらの病症がある時は、合穴とか水穴を使ってみる、という事にしています。

Ｍ：はい、ちょっといいですか。そしたら沈で実というものにしか使えないのですか。

Ｈ：沈で実の場合だけではないです、虚の場合でも使えると思います。

Ｍ：要するに脈が沈んでなかったら、要するに冬は使えない、ということですか。冬の治療はできない、ということなのでしょうか。

Ｈ：あの、冬の邪気として捉えた場合は、沈脈が必要だと思います。

Ｍ：という事は、脈を診て、沈の脈を打っているという事を、まず探さないと、冬の治療は、冬の邪の治療はできないと、まぁ、効果が少ないという事になりますか。

Ｈ：僕はそういうふうに考えています。

Ｍ：その辺り、皆さん、どう考えていますか。あの浮いていて、例えば、浮いていて合水穴を使ったとしましょう、この場合って、どうなのでしょう。冬の治療に、どう言うのでしょう、あの、ある程度繋がって行かないモノなのですか。

H：僕が使う時は、邪気ではなくて、精気の虚がある時だったら合穴で補法をする時に、浮いている所という事で使います。

Ｍ：ただ、邪って言うのは、必ずしも、収まる所はね、例えば、沈脈、沈で、十五菽であったとしても、例えば、今の邪ですよね、入って来る時って、すぐそこに入るわけではない場合も多いわけですよね、精気の力によっては、皮毛のあたりに止まる事はいくらでもある、と言うのが邪論の基本ではないでしょうか。

Ｈ：あの、陽の部分に冬の邪が入っているとすれば、浮いたところで、冬の邪を表わす脈状が出ていることもあります。

Ｍ：ありますよね。そうしたら、脈は必ずしも沈で実、沈で虚とか、と言うことにはならない、こともある訳ですよね。（Ｈ：そうですね、はい）それで良いですか。（Ｈ：はい）はい。という事らしいですよ、皆さん。おわかりでしょうか。一応、収まる所はここですけど、例えば、十五菽あたりで収まるのでしょうけど、でも、実際には、そのプロセスは色々ありますよ、と言うような話だったと思うのですけど。宜しいでしょうか。

岩本：すみません。邪正抗争でも、浮にも、その邪正抗争の状態が出るという事ですよね。

Ｍ：当然ですよね。（岩本：ええ）うん。邪正抗争はずっとしているのですよ、ただ、それが症状として出ているかね、出ていないかもしれませんけどね。何かしているのですよ、絶対。それが多分、邪正抗争、邪正論の理屈と思いますね。大きな小競り合いはしなくても、ちょっとね、小さなね、なんか、もめごとぐらいはあるのでしょう。ぐらいが、どう言うのでしょうかね、邪正抗争の理屈ですよね。（岩本：どうもありがとうございました）はい、江田先生、どうぞ。

江田：すみません、えっと、浮いていて冬の邪を見つけるコツと言うか、何かありましたらお願いします。（Ｍ：どうでしょう）

Ｈ：はい、えっと、普通に、その石脈と言うものがですね、沈んでない状態ですよね。だから、滑脈ですよね。滑脈が浮いている時ですよね。でも、この季節で考えるのでしたら、それはもしかしたら滑脈と言う言葉でちゃんと説明できるのだったら冬の邪だけど、指の当たり方が大きくて丸っとしていたら、もしかしたら、僕は夏の邪かもしれないな、と思ったりして、診察法が始まりますよね。身体が暑くないですか、とか、それで、足が冷えるだとか、言われてきたりとかですね、４９難で液の状態が出てきたりすると、湿邪かな、というふうに切り替えるかな、というところですよね。難しいですよね。

Ｍ：でも、滑脈というのは、湿に熱が絡んでいるようなものじゃないですか。（Ｈ：そうですね）熱だけではないでしょう。つるんとして早い（Ｈ：はい、そうです）そう言う事なんじゃないですか。（Ｈ：水と熱が合わさったもの）だから、それが表面にあっても良いわけですよね。どうでしょう、江田先生、よろしいですか。（江田：はい、ありがとうございます）次、いっても良いですか。じゃ、いきましょうか。

Ｈ：冬の邪の所では、最後は治験例ですね。治療した時のお話をしたいと思います。この患者さんは、便秘の患者さんですね。７０歳、女性の患者さんで、診ました。よく食べるのですね、調子がいい時は快便なのですが、たくさん仕事をしたりとか、疲れた時に便秘になりやすい。あとですね、一年間通して治療室に来られるのですが、冬になると便秘をする、という事が何年間かかかって分かったことなのです。で、そういう時は、やっぱり足もすごく冷えているし、この冬の邪の影響を受けている病症と言うものも、混ざっているから冬の邪の影響を受けているとして、疑っていった、という事です。脈を診ると沈で、遅で、滑で、実の脈状だったのですね。左尺中です。腎の見所です。腎に営分にですね、冬の邪気が入ったという事で診たわけです。ここでは冬の邪の話だけなのですが、尺膚などを診るとですね、さきほど、中本先生と森本先生がお話して下さった内容に近いですけど、沈脈という事で、表面の脈は軟らかく感じるのですね。柔らかいから飲食労倦の邪と言うようなことも考えたりする訳なのですが、お腹とか尺膚を触るとそんなに指がズブズブ入って行かない、奥まで指が入らないというか、軟らかくないのですね、特にお腹は、全然表面が軟らかくなかったりしていたり、少し軟らかい中に、充実したもの、弾力のあるものを感じている、という事で、湿邪と言うか、冬の邪の影響を見つけたと、言う事で、腎の陰谷穴ですね、このツボを触ってみました。少し深い、営気の部分なので深い部分なので、衛気を退けて、指を、その邪気の在る所に持っていくとですね、脈状が変化するわけですけど、沈脈が少し浮いてきて、遅脈だった遅い脈も少しリズムが出てくるのですね。で、弾力のある、ちょっと弾力がありすぎる滑脈なのですけど、それも徐々に、触っていて酷くない堅さに、まぁ、良い弾力と言いますか、そのような手触りになったので、このツボを使った、という事です。で、鍼はですね、先ほど、手法の事もお話したのですけど、押手を構えて、衛気を退けて、押手を構えて、僕は基本的に流注に、迎随に従ってやっていますので、えー、鍼の角度はですね、めちゃくちゃ深い所じゃないと思ったので、６０度ぐらいですね、それぐらいの角度にして、瀉法をしていきました。で、あの、僕が鍼をする時、垂直に鍼をしないでちょっと寝かせてから徐々に角度を付けて行くようなことをしています。で、最終的に刺鍼した後は取穴した時よりは、脈状は改善したという事で本治法は終了しました。治験例は以上です。

Ｍ：はい、何か疑問。沈で、遅で、滑で、実って脈状言われましたけど、滑って割と数のイメージないでしょうか。それともう一つ、最後の方に、鍼を倒して、それから起こしていくっていうのは流し込む感じですよね。なんか、邪の治療とは逆の、それ邪の補法されたのですか、邪の治療されたのですか。

Ｈ：あの、邪の瀉法をしました。（Ｍ：瀉法ね）

Ｍ:ね、形としては、そういうことを言っている表現でしたね。と言うようなことで、何か疑問点、それから私ならこう思う、何かありますか。え、小池先生、はい、どうぞ。

小池：すいません、質問と言うか確認なのですけど、迎随に従ってって言うのは、どういうこと。

Ｈ：瀉法なので流注とは逆の方向に鍼先を向けたという事です。

Ｍ：迎随に逆らってやね。（Ｈ：すみません）逆らわないとあかんわね。

小池：わかりました。それから寝かせてから角度を付けるっていうのですが、私は、あの、寝かせて、角度を付ける、付けながら何処で止めるか、止めてから瀉をするのかな、と思ったのですけど、今の森本先生の説明やったら、もう寝かせながら瀉法に入っている、あっ、でも、森本先生のやったら補法（Ｍ:そう、わしのは補法）寝かせながらも手法をしていっているのかな、というイメージやったのですが、それは、本田先生自身はどちらなのでしょうか。

Ｈ：あの、寝かせるというのはですね、あのすごく水平に寝かせているのではなくて、ある程度角度、６０度って言ったのですけど、６０度の前ですよね、３０度ぐらいから、あの、鍼をして、邪気が集まってくるかな、という指先の感覚ですよね、感覚論なのですけど、それで指先に邪気が集まったと思った所がだいだい６０度ぐらいだった、という事で、抜いて瀉法をしたという事です。

小池：角度、角度を動かしながら、その段階で瀉法をしつつで。

Ｈ：しつつと言うよりも、一番邪気が集まってきて抜けるのは、どこかなって、探している感じでしょうか。（小池：はい、わかりました、ありがとうございます）

Ｍ：はい、他はどなたか。なんでもいいですよ。手法でもいいですし、ツボは水穴でしたか（Ｈ：水穴です。陰谷）陰谷ですね。遅脈ですから、陰谷を使われた、という事ですか。はい、福永先生。

福永：すみません、あの、取穴をする際に、その邪のある所を意識して手を持っていっていく、毎回、そういうふうにした方が良いのでしょうか。（Ｍ：どうでしょう）

Ｍ：僕は、一番最初は、あの、陥下している所とかですね、冷たいとかありますよね、ツボ反応の所、そこを触っているのですよ、で、これも直感言うと、それまでなんですが、その陥下している所の中で、一番深くない所を探している、ところかなって言う。陥下と言うと、何かべこっとへっこんでいる所ですよね。そこではなくて、それよりも、もう少しわかりにく陥下を探しているか、そこに押手を構えたり、指を持っていくようにしています。はい。

Ｍ：どうでしょう。わかりにく陥下、よけいにわかりにくいです。（Ｈ：わかりにくいですよね）

福永：あとで実技で教えてください。

Ｍ：そうですよね、実技で確かめる方が良いのでしょうけど。あの、確かにね、陥下と言っても、ペコッとへっこんでいるからして、ツボ反応がないこともいくらでもあるのですよね。ツボ反応と、どういうのかな、陥下とかイコールだったら良いのですけどね。イコールじゃないことがけっこうありますから、凹んでいる所が必ずしもツボ反応を、良いツボ反応、要するに臨床的であるということが、ないこともある、と思っておいてもらったら良いのではないでしょうか。で、あとは昼から勉強して下さい。（福永：ありがとうございます）はい、他は。岩本先生。

岩本：えっと、本田先生。角度の問題、６０度とか、数字を挙げてくださって、それは分かり易い為に仰ったんだろうと思います。で、あの、角度って言うのは、こう動かしたときに自分が、ここだっていう時が伝わってきて、それで私は、それで決めているのですけど、先生もそうじゃないのですか。角度、何十度とか、そう言うのを考えずにね。感覚で。

Ｈ：はい、えっと、感覚って言うと、それまでなのですけど、古典によく、鍼をしたときに気を得て、とか書いてますよね。その気を得て、と言うのを感じようと思ってやっているのですけどね。その感じがどこで感じているのか、という事もありますよね。お腹で感じる、頭で感じるとか、色々仰る先生方がたくさんいるのですけど、僕は指先、押手の中で感じているのですよ。あの、ちょっと抽象的過ぎで変な話かもしれないのですけど、もわっ、とかね、そういうのを感じるのですね、温かくなったりするとか、ま、冷たくなったりするときもあるのですけど、そういうのを感じてやっています。で、この角度は何度ぐらいなのか、と見ると、あの見なくても指と鍼の角度で、形で何度かというのがわかるので、これは、一応６０度だとか９０度だとか、一応、数字で説明しています。逆に先生はどういうふうに感じているのかな、と思ったのですけど。いかがでしょうか。

岩本：えっと、そうですね、何か、そこに来たら、一番正し角度の所へ来たら手が止まる、という事ですね（Ｈ：止まるのですか）ええ、あっ、ここだ、だから何度とか全然わからないです。

Ｍ：名人芸は昔はそう言う事をよく言ったのですよ。ね、でも、若い人とか分からない人とか伝える為にはね、やっぱり非常に抽象的なんですよね。だから、そのあたりもですね、これから言葉にするとか、言うような努力をしていくと皆が共有できる、と言うような感じはしますけどね。感じです、感じですと言うと、ほんとうにね、どう言うのですかね、そこで話が終わってしまいますので、できればもう少し言葉にしていくという努力を皆さんして欲しいと思いますね。

Ｈ：はい、いいですか、（Ｍ：はい）その感じって言うのをいけないと思って、角度の話をしているのですけど、あの、菽法の数字ありますよね、３から１５、まぁ、１５という数字は書いてないのですが、骨に至るまでの、あの、その五段階で角度分けをすると分かり分かり易いかもしれないですよね、浮沈とかで考える場合は、浮沈と言うと、もう二つしかないですから、寝かせるか立てるかの二つしかなかったじゃないですか、それを、ま、分けるのを増やせば増やすほど難しくなるのですけど、一つの基準にできるのではないかと思っています。

Ｍ：どうなんでしょう。３菽でも立てれば９０度までいけますよね。

Ｈ：いや、そうなんですけど、邪気の在る場所で、（Ｍ：うん）鍼を立たせたり、アプローチする場所を決めるって言うのだったら、あの、寝かせるところを、まぁ３菽と言うふうに決めて段々角度を付けて行っても良いですし、という事です。

じゃ、やっぱり３０度とか中途半端な角度じゃなくて、やっぱり、どう言うのですか、１０度以下とか５度とかね、３度とかね、そんなような、レベルじゃないのでしょうかね。３菽でもし勝負するということがあるとすれば、（H：僕も、たぶんそれぐらいだと思っています、３菽の場合は、はい）あとは、あの、こういう話、昔もしましたよね。えー、誰だ、西野皓三さんですか、あの合気道のね、西野流の西野皓三さんが言った言葉で非常に脳ミソに残っていて、要するに、なんでしたか片岡先生、意識はエネルギーに方向性を与える、でしたね。（片岡：はい、その通りだと思います）意識はエネルギーに方向性を与えるのですよ、だからね、自分が１５菽に伝わって欲しいと、思いながら鍼をすれば、本当は伝わる、というのが気の世界なのですけどね、だから、そいいう意味では先ほど言った３菽の角度、それから６菽の角度、それから９菽の角度、それから、なんぼですか、１２菽、１５菽ですか、五つを、９０度を５つに割ったらどうなるの、１８度、１８度ぐらいじゃない、１８度よ。１８度ずつになるやん。ね、というような、なんか、どう言うのですか、これからの研究課題になるかもしれませんね。はい、ただ、３菽と６菽と９菽が豆になっているけれど、実際にそれと角度と合わせられるのかね、そのあたりも研究課題でしょうね。よろしいですか。何もこういう所で結論を出す必要はないのですけど、本田先生は、そういうふうにやっておられると、いう事ですね。で、岩本先生もそう言う所で、良い所で止まるから、という事ですよね、で、僕の意見は、そういう技術をね、極力言葉に替えて下さい、というお願いをしてね、よろしいですか。はい、じゃ、時間。あと、何ができる。はい、じゃ、行きますか。

Ｎ：はい、えーと、次、４９難の診察法に入ります。ちょっと１７分で時間がないのですが、やっていきたいと思います。実技カルテを診てもらったら分かりやすいのですが、４９難のことはですね、４９難に季節の事は書かれていないのですが、冬と湿というのは関係が深いと診ています。で、冬の邪というか、湿邪ですね、液に影響します。湿邪に侵されると、液に関する徴候が、この実技カルテにも一番右の方に書かれていると思うのですが、そういうふうな徴候が現れます。肝に湿邪が入れば涙に影響しますし、これは望診や問診でしることが出来ると思います。で、心に入れば汗ですね、これも望診、問診、ま、切診でもしることができます。涎、脾に入ると涎になります。これは望診、問診などで診ることができて、最後の腎ですね、これが唾になります。唾も望診、問診などで情報を得ることが出来るかと思います。今、かなり寒くなってきたので、気の巡りっていうのが悪くなりますよね、で、蔵の生理病理を考えますと、肺は気を主っています。で、秋に、先ほども、これを言ったのですが、秋に肺がきちんと養われないと、次の季節、今の冬の時期に影響がでます。そして、その一つに液の異常が現れる、という事になります。素問の四気調神大論篇には、消化不良で下痢になる、という症状が出ています。下痢にならないまでもですね、そう言った気の力が弱まれば、津液の流れに影響が出て、そして、さきほど言った徴候が出てくる、というやつですね。先月も話、森本先生から話がありましたけど、樽の理論と言うのもありますし、肺の力が弱くなっていれば、尿の出方にも問題が出てくると、いう事になります。尿だけでなくて、他の体表の津液の状態も悪くなると、いう事が言えると思います。最近の涙とか、鼻水とか、というような症状を表わしている方をちょこちょこ見かけます。鼻水なんかは多いですよね。唾はですね、問診で、一応確認、僕はやっています。やっていますけど、意外と本人の自覚がないことが多いのではないかな、と思います。そこで、舌診ですね。舌を見せて下さい、という事を言うと、見せてくれるのですけど、舌は光沢があってですね、てかてか光っている人、これは湿が入っていると診ています。もう、なんか、シロップ漬けになっている感じですね、ぴかぴかしている。という人が結構います。で、舌見せて下さい、というと、唾を飲み込んで見せてくれる人がいるのですね、こういう人は、一応、津液が一杯あるのではないか、というふうなことで、一応疑ってですね、あとは他の脈とかである程度確信を得て、そして、何回か臨床の中で、舌を見せてもらう、というふうな事をやっています。毎回、そういう人は飲んだりしますね、そうすると、唾が一杯出ているのではないかと言えるので、本人の自覚がなくても、そう言うものがわかるかと思います。脾の涎と腎の唾っていうのは、違うものだと、僕は思っています。この涎ですけど、これも本人の自覚があるかないのか、ちょっと微妙じゃないかな、と思います。口の横にちょっと唾が出ている人だとか、何か集中して、下を向いて集中していると、こう唾をすするような、涎をすするような人が時たまいるような気がするけど、一瞬の事なので、そういう事は忘れてしまうのではないかと思います。あの、問診で聞いても、問診で聞いても、そいう言うのは出てこない場合がありますけど、ベッドに寝ている時にうつぶせになっている状態のときには、あの枕カバーが時々濡れている人がいますので、そう言う人は涎が出ているのではないかな、というふうに思います。これは脾に入った場合ですよね、脾に湿が入った場合の事なので、脾の力が弱まると、口元も緩むので、ちょっと出るかなと、それで涎という事が現れるのかな、と思っています。汗ですね、以外にも汗かいている方っておられるのではないかと思います。僕はさっき、最初の喋っている時、けっこう汗をかいていたのですが、これは緊張してかいていたのですけど、あの心に湿邪が入った場合ですね、汗が出た場合、心に湿邪が入ると、寒い時期にもかかわらず、じっとり汗を書く人、べっとりかく人、けっこうおられます。手に汗があふれる人もいますね。手のひら、足の裏、あの、それと服の中に手を突っ込むと、もわっとしている、湿気が有る状態の人なども、これは汗をかいているな、というふうに、僕は診ています。来院された時に、どうやってきたのか、というのも思いますけど、走ってきたとかですね、近くなので急いで、時間がないので歩いてきたとか、そう言う人も汗が出るのですが、元気な人はすぐに引いたりとか、今の季節でしたらね、すぐに汗が引いたりしますので、その辺もちょっとわかりやすいのでは、と思います。で、脈は先ほども言った通り沈脈が基本となっていると思います。で、そこに蔵の性質というものが入りますね。肝に入れば弦、心に入れば大になって、そして、他の外邪は全て浮に対してですね、湿邪っていうのは沈になるわけですね、この４９難には沈という脈が書かれています。沈んでいれば、先ほど、本田先生が言われた通り、湿邪というふうに診てですね、そういうものを疑って四診法に気を付けて診るようにしています。あとは湿邪入った蔵の湿邪をとる、ということですね。で、わからない、脈がどうしてもわからない、という方、僕も最初は、今もわからないことが多いのですが、分かりにくい場合は、そういうふうな液の問題ですね、液の問題で、湿邪が入ったことがわかりますので、４９難というものを利用すれば、けっこうシステマチックに証が、証というか外邪が出てくるので、治療がしやすい、という事になります。えーと、ここで質問があればお願いします。

Ｍ：どうでしょう。これ４９難て、どう言うのですかね、相当システマチックで非常によくできている難だと思うのですが、これを頭の中に入れるだけで、相当な治療ができるようになりますからね、みなさん、ぜひ、４９難は勉強されるといいと思います。何か質問はないですか。じゃ、次に行きましょうか。

Ｎ：じゃ、僕の方から質問があるのですが、今、この液に異常が出るといいましたよね、腎に湿邪が入れば、唾が出る、と言ったと思うのですが、時々出ないという人がいます。カラカラの人、そういう人はどう考えるのか、ということがちょっと疑問にあります。で、もう１０年以上前、４９難を僕が知らない時、診た患者さんで、汗が出ない人がいたのですね、もう体表を診るとカラカラな状態、中にはけっこう津液、津液というか、そんなに干からびているという感じはしなかったのですが、汗が出ない、と言われる方おられました。出ると気持ちが良い、というか、楽になるのですが、苦しい、出ないと苦しいと言われる方がおられたのですよね、それで出ない、というのは古典にはどういうふうに書かれているのか、その調べてもちょっとよくわからなかったのですが、ご存知の方がおられれば、ちょっと教えて頂ければと思います。

Ｍ：どうでしょう。ま、枯れて出ないのと、それから詰まって出ないのは全然意味が違うのですけど、どうでしょう。邪にやられていないと、湿邪にやられていないということですよね。経口補水液なんかをやれよ、という世界ですよね。シェーングレン症候群ですか。なんか、そんな感じですよね。じゃ、これはどういうふうに治療すべきが。邪の治療をした方が良いのか、それとも精気の側から補って、そういうアプローチをした方が良いのか、というようなことが考えられますよね。みなさん、どうでしょう。

Ｎ：あの、先月、実技の時に甘味の事が出たと思うのですね、甘味があまり好きではない、というようなことで、反省会の時に意見が出て、僕は、その甘味が嫌いというのは、素問で言えば、甘味が好き、というふうに書かれているので、飲食労倦の邪が入った場合ですね、で、他の古典には嫌いな場合もある、という事が出ましたよね、そいうことが、この汗とか液にもあるのかな、と思ったのですが、ないのですかね。

Ｍ：汗って、無汗という症状がありますよね。（Ｎ：はい）なんか、漢方薬の本に無汗って書いてありますよね。あのようなものはどういう病理なんですか。本田先生。

Ｈ：はい、無汗はですね、皮膚の腠理が開かない状態で無汗になっているのですよね、で、色々原因があるのですけど、気の巡りが悪くなって皮毛に流れている気が上手に働かないと腠理が開かないと、邪気で考えれば、表面に邪気が乗っているので、精気が上手に働くことができないから腠理が開くことができなくて、汗が出ない状況になっている、というような考え方ができます。

Ｍ：という事らしいですけど。

Ｎ：何の邪っていうのは無いのですか。

Ｈ：あのほとんどが表面の邪気ですよね、表面を襲う時の邪気ですから、色んな邪気がありますよね、（Ｎ：色んな邪気で考える）傷寒論だったら、中風とかですよね、傷寒も入っていますけど、特によく出てきますよね。

Ｍ：さっきの唾がでないというのは、病理的には。どうでしょう、本田先生。

Ｈ：唾が出ないというのは、これも五藏全部で考えられるのですけど、腎で言えば、水を動かすことが出来なくなったり、水がないという状態もあるし、逆に腎だけではなくて、熱、心の熱が暴走して乾かしている、ということも考えられますし、色々考えられる、病症ってどういうふうに考えたら良いのかって言われたら、だから、僕が思うには、４９難で考える場合には、古典には汗が、液がたくさん出るって書いてあるので、書いていなくてもですね、液に関係する病って言うのを、として、診ていくという事も一つではないのかな、と思ったりですね。それと、逆気して泄す、というのがあるじゃないですか、４９難の病症のところには書いていないのですけど、泄すという時に、大小便を泄すというような書き方がされている分けなのですが、逆に出ない状況、便秘だとか尿閉だとか、そういうのも腎とか膀胱の病症に入っているので、それももしかして含まれているのかもしれないな、と言うところです。はい、以上です。

Ｍ：はい、両方あり、ということですね。それともう一つ大事なことですけど、単に唾が出ないというだけでは、当たらないモノでも、他の、どう言うのですか、他の診察法をすることによって、違うものが見つかって、そこからアプローチしていくと、いうのも古典の良い所、古典鍼灸治療の良い所だろうと思いますので、そういうふうにものを考えられてはどうでしょう、中本先生。

Ｎ：今であれば、他の液という湿邪では考えないかな、というふうに、この状態は思いますけど、その時のことを考えて、どういうことかな、と、先月の甘味のことも考えて、もしかして古典にそういう記述があるのかな、というふうなことが気になりましたので、質問させていただきました。

Ｍ：はい、後時間は、じゃ、もう今日はここまでになりますか。はい、時間がないのでね、質問もご意見もけっこうです。七回目の座学、どうもご協力ありがとうございました。おしまいです。